

〈翻 訳〉

こんにちの高等教育におけるサービスラーニング¹⁾

バーバラ・ジャコビー²⁾ 著

山 田 一 隆(訳)

サービスに対するこれまでの関わりを刷新することが、高等教育には迫られている。増え続ける社会の問題に対応したり、増え続ける人々のニーズに対処したりする先導的役割を想定することが、大学等には求められていると第一線の専門家たちは言う。実際、行動への彼らの要請は、強い要求として結集しており、高等教育機関に、これらの問題やニーズへの対応に自発的に従事することをせまっている (Bok, 1982, 1986; Boyer, 1990, 1994; Ehrlich, 1995; Hackney, 1994; Kerr, 1963; Newman, 1985; Wingspread Group on Higher Education, 1993)。Ernest Boyer (1994) は、「100年前に農業や工業のニーズに対応した land-grant colleges のように、子どもや学校、地域と向き合うという挑戦に対応すること」(p. 48) が大学等には求められていると主張している。Derek Bok (1982) は、「社会のニーズに配慮するということを気詰まりに感じるという大学側の理由などはない。実際、大学はそれをしなければならない義務があることは明白なのだ」(p. 301) と主張する。孤高の「象牙の塔」精神は、地域社会や国家を侵食する問題から大学を遠ざけてきた。サービスとの新しい関わりは、それを嘆いていた高等教育の批評家たちに時間をかけて対応していくことでもあるだろう (Harkavy, 1993, p. 45)。

それと同時に、高等教育は、学生の学習という最も基本的な目標を達成する際の効果について疑問を抱いている。学部での教え方に無頓着であったり、内輪の調査を過度に強調したり、道徳的な性格や市民意識を増進することに失敗したり、雇用市場のために卒業生を準備させることに狭く焦点を当てたりすることを膨大な論文や報告書が批判してきた (Ehrlich, 1995; Hackney, 1994; Pew Higher Education Roundtable, 1994; Wingspread Group on Higher Education, 1993)。

しかし、こんにちの学生は、社会の問題に無理やり向き合わされていると感じながら、登録した科目の中で地域社会サービスに参加している。1994年秋に入学した学生のサンプルにおける

1) Jacoby, B. (1996): 'Service-Learning in Today's Higher Education'. in Jacoby, B. et al. "Service-Learning in Higher Education: Concepts and Practices", Jossey-Bass. pp. 3-25. Copyright © 1996 by Jossey-Bass Inc., Publishers. The article of Japanese language edition is reprinted with permission of John Wiley & Sons, Inc.

本稿は、訳者が John Wiley & Sons 社の許諾を得て、上記論文を邦訳し公表するものである。

2) メリーランド大学スタンプ学生ユニオンおよびキャンパスプログラム上級研究員 Senior Scholar for the Stamp Student Union and Campus Programs at the University of Maryland

Alexander Astin の調査は、70%以上の学生が高校時代にボランティア活動をやったことがあると報告している (Astin, Korn, and Sax, 1994)。小学校や中学校でも地域社会サービスがますます求められるようになれば、こうした学生の割合はただ増加するのみであろう。

実際、Arthur Levine が1993年に9,000名の学生に対して行った調査 (Levine, 1994, p. 4) によれば、64%の学生がボランティア活動に関わっている。こうした関わりの多さは、あらゆる高等教育機関において起こっている。短期大学で59%、4年制大学で67%、総合大学で68%といった具合だ。男子学生で62%、女子学生で66%が関わっており、上回生で63%、低回生で65%が関わっている。この割合は、有色人種の学生で62%、白人の学生で65%といずれも高くなっている。また、この傾向は、あらゆる地域で起こっている。北東部で61%、中西部で65%、南部で64%、西部で67%である。学生は、子ども、10歳代の若者、身体や精神に障害のある人々、高年齢者、虐待を受けた女性、AIDS 患者らとともに活動しながら、広範な地域社会サービス活動に参加している。こうした活動は、飢え、ホームレス、非識字、健康管理、教育上の不利、環境などの膨大な問題に彼らを気付かせる。尊敬すべき Harvard 大学のサービスラーニング service-learning 教育者である Robert Coles (1993) は、1960年代の若者と比べて、「地域社会サービスを通じて世界を変えようという政治的社会的な衝動や実践的な欲求が非常に強いことを、こんにちの学生は表現しようとしている」(p. 40) と指摘している。

国境を越えて大学等が、学生が地域社会、国家、世界に役割を果たせるプログラムを開発し、同時に、学部教育を豊かなものとするために、これらのプログラムにサービスラーニングの概念を採用することはとても重要である。本章では、サービスラーニングを定義するとともに、サービスラーニングと伝統的な地域社会サービスの違いについて解明することにする。そのことは、歴史的な概括とサービスと学習の不可欠なつながりを理解するための文脈を提供することでもある。すなわち、実践の現状を述べ、サービスラーニングと制度的な教育目標との関係に光を当てるものである。

サービスラーニングの定義

Robert Sigmon (1994) は、「サービスと学習の一般的なフレームワークにおいて、たくさんの定義とアプローチが使われている」(p. 1) と記している。Jane Kendall は、『サービスと学習の結合』(1990) の導入部分で、サービスと学習を結びつける用語について何百もの議論に参加して、「おそらく、その議論は永遠に喧々諤々の議論を醸すだろう」(p. 18) と主張している。彼女はレビューした文献において147の言葉に出くわした、こんにちではもっと多くなっているだろうとも付け加えている。

本書の目的に沿えば、サービスラーニングは、次のように定義される。

サービスラーニングとは、学生の学びや成長を増進するような意図を持って設計された構造的な機会に、学生が人々や地域社会のニーズに対応する活動に従事するような経験教育の一形

式である。省察 reflection と互惠 reciprocity は、サービslラーニングのキー概念である。

service-learning の中に入っているハイフン “-” は、サービスと学習の共生関係を象徴する点でとても重要である（1995年4月に S. Migliore と交わした個人的なやりとり）。サービslラーニングの定義で *community* という言葉は、地域の近隣関係、州、国家、国際的な共同体をさしている。サービslラーニングが対応する人々と地域社会のニーズとは、*community* によって定義されるニーズである。

Sigmon (1994) は、大学等においてみられる4つの違いに注目したサービスと学習の有用なタイプロジーを提案している。すなわち、学習目標が第一義であって、サービスの成果は副次的なものであるという “service-LEARNING”，サービスに関する行動が中心にあって、学習は副次的なものであるという “SERVICE-learning”，間のハイフンがないことが指し示しているように、サービスと学習が完全に切り離されているという見方の “service learning”，サービスと学習目標とに同じウエイトが置かれていて、「ハイフンが不可欠」な “SERVICE-LEARNING” の4つである（p. 2）。本書では、Sigmon も提唱している最後の関係性を支持することにした。

この本は、確固たる立場をとっている。それは、すべての学習が教室で行われるわけではないから、サービslラーニングはカリキュラム上のもの curricular であり、そこまでではなくてもカリキュラムに沿ったもの cocurricular でもあるというものである。サービslラーニングの現在の定義のうちには、カリキュラムに統合されていなければならないというものもあるが、実際には、学生の学習は、学部教員に加えて、学生部門の専門家やキャンパスミニスター campus minister, 研修を受けた学生リーダー、地域社会の構成員らによって構築、支援されるものである。クラス会議や講義概要、宿題、評価、単位といったカリキュラムによって供給される構造は、いとも簡単にサービslラーニングの望ましい成果を達成する責任を学生に担わせるけれども、そこまでではなくてもカリキュラムに沿った経験が、設計上また実行上熟練に富んだものであれば、豊かな成果をもたらすだろう。学習や成長に関する成果は、必ずしもディシプリンや特定の科目内容に関係するものではない。これら潜在的な成果については、第3章³⁾で議論されている。

炊き出し所での給仕や環境浄化プロジェクトへの参加といった1回か短期間の経験は、サービslラーニングと呼べるのかどうかという議論も続いている。本書では、それらの取り組みに省察や互惠といった基本的な概念が含まれているならば、他の地域社会サービスやボランティアプログラムとそれらを、サービslラーニングとして区別することができるものとする。これらのプログラムのうちには、こうした概念の一部を含んでいるものもあるが、多くはそうでもない。*service-learning* という言葉を使う場合には、概念と実践の両面において省察と互惠が中心にあるという含みがある。

3) McEwen, M. K. (1996): 'Enhancing Student Learning and Development through Service-Learning'. in Jacoby, B. et al. "Service-Learning in Higher Education: Concepts and Practices", Jassay-Bass. pp. 53-91.

省 察

経験教育やサービ斯拉ーニングの形式は、教育学的原理に基づいているので、学習や成長は必ずしも経験それ自体の結果として起こるのではなく、学習や成長を涵養するように明確に設計された省察的な構成要素があつての結果として起こる。Jean Piaget から William Perry にいたるまで、あるいは、James Coleman から David Kolb にいたるまで、また、John Dewey から Donald Schon にいたるまで、学習に関する理論家や研究者の仕事は、思考と行動、省察と実践、理論と応用といった組み合わせを通して、わたしたちは学ぶものであることを示唆している (Kendall, 1988)。サービ斯拉ーニングプログラムの違いは、学習目標のタイプの違いを強調するものである。すなわち、理論的、市民的、倫理的、道德的、比較文化的、職業的、個人的といった違いである (Kendall, 1990)。プログラムは、これらの目標の組み合わせの違いにも光を当てる。

サービスが対応しているニーズの背後にある社会の大きな問題に関する学習を増進するように、サービ斯拉ーニングプログラムは、明確に構築されている。この学習には、対応しているニーズや問題についての歴史的、社会学的、文化的、経済的、政治的な文脈をより深く理解することが含まれている (Kendall, 1990)。たとえば、ホームレスの一時収容所で働く学生には、次のような疑問を抱くような省察を設計できるであろう。学生が抱くべき疑問とは、どうしてホームレスの人がいるのかなあ、国や州のどんな政策がホームレスの人に影響を与えているのかなあ、根本的な問題の原因を特定してその解決に当たるよりも、なぜ、ホームレスの一時収容所を作るのかなあ、もしホームレスが世界的な問題だとしたら、他の国々はどのように対応しているのかなあ、といったものである。省察は多くの形式を取ることができる。すなわち、個人やグループ、口頭や記述、ディシプリンに基づいた科目内容に直接関係するか否かといったものだ。一緒に参加した受講生どうし peer やプログラムの指導者からフィードバックを受けるのと同様に、サービスを提供した人たちからのそれを受ける機会を参加者に与えることが、省察には含まれているべきであろう (Porter Honnet and Poulsen, 1989)。

互 恵

サービ斯拉ーニングの他の不可欠な概念として、サービスを提供する側とサービスを提供される側との間の互惠がある。「サービ斯拉ーニングに関するすべての集団が学習者であり、何を学ぶべきかを決定する手助けをする。サービスを提供する側とサービスを提供される側の両方が教え、学ぶのである」 (Kendall, 1990, p. 22)。サービ斯拉ーニングにおいては、サービスを提供される側が、提供されるサービスを左右する。地域社会の構成員が地域社会のニーズを決定し、サービスの課業は何かを定義する。サービ斯拉ーニングでは、学生の学習成果が望みどおりになるということだけに基づいた地域社会の設定の中に学生を送り込んだりすることや、ニーズの原因を探したり対応したりするよりも、実際のニーズに対処せずにその状況を永続させるようなサービスを提供したりすることは、避けなければならない。

互惠を通して、学生は、より大きなコミュニティの構成員として、より大きな帰属感や責任感を身につけるのである。サービスを提供される側の地域社会の構成員は、彼らが持っているニーズに対する責任をどのように果たしたらいいのか、ニーズに対応するための仕組みや関係性づくりを進めるにはどのように仕向けたらいいのか、を学ぶことになる。したがって、互惠は、「サービslラーニングで交流した個人間に、相互の責任感と尊敬の念」(Kendall, 1990, p. 22)を創出する。だから、サービスに対する伝統的、父親的温情主義的、一方向的なアプローチと比べて、サービslラーニングは、ある人やグループには、資源が不足しているとみなされる人やグループと分有する資源があるという立場に立っている。互惠は、相対的に能力のある人が、相対的に能力のない人を助けるという考え方に基づいた伝統的なボランティアの概念も避けている。古いパラダイムでは、その状況や原因を十分に理解する前に他の人々の問題を解決しようとボランティアは試みることが多い。サービslラーニングは、他の人たちのために何かをするよりも、他の人たちと一緒に何かをすることを学生に奨励する。誰もがその過程で変わることを期待すべきなのである (Karasik, 1993)。

サービslラーニングにおける *service* という言葉の使い方について、まともに挑戦した著者もいる (Cruz, 1994; Kendall, 1990; Seidel, 1994)。彼らは、個人やグループが他の個人やグループに何かをすることについてサービslラーニングの参加者の間に不均衡があるのではないかと指摘している。Howard Berry (1988, p. 3) が、サービslラーニングの交流の相互性と言っているけれども、こうした不均衡は「評価の対等性」に反している。アフリカ出身の米国人をはじめとする迫害を経験したことのある人々にとって、*service* という言葉は、いまだに非自発的な強制労働を暗示している。*service* は、自分よりも運に恵まれていない人たちに、金持ちの人が「何かを施すこと」を意味する独善的な意味でも用いられる。にもかかわらず、筆者は、Kendall (1990) や Berry (1994) を支持する。*service* という言葉は扱いにくいけれども、もっとも共有できて理解しやすい言葉であるからだ。

プログラム、哲学、教育学としてのサービslラーニング

本書だけでなく膨大な他の文脈においても、サービslラーニングはプログラムとして言及されることが多い。高等教育におけるサービslラーニングプログラムを話題にするのは都合がよいのだが、サービslラーニングはひとつの哲学であり、教育学でもあるということをここに記しておくことが重要だ。そして、不幸にして、時として政治的な立場として解釈されることもあるのだ。

プログラムとしてのサービslラーニングは、「意図を持った学習目標、自覚的な省察、批判的な分析」(Kendall, 1990, p. 20) を組み合わせて、人々や地域社会のニーズに対処する課業をやりきることが強調される。参加者が従事する課業は、チューター、炊き出し所やホームレスの一時収容所での労働、病院や他の健康施設でのアシスタント、環境浄化、住宅や地域社会施設の改装や建設現場、といった直接的なサービスであることが多い。住宅、経済開発、環境、教育、ヒューマンサービスといった問題に関するアドボカシーや政策レベルの課業を含んでいることも

ある。サービスマーケティングプログラムには、異なる目標と異なるアプローチがある。たとえば、カリキュラム上のプログラムは、ディシプリンを基礎にした教育、あるいは一般教養の一部としてサービスマーケティングを捉えている。そこまでではなくてもカリキュラムに沿ったプログラムは、リーダーシップ、市民権、精神的な成長を目標としている。したがって、省察の構成要素は、異なる学習成果に焦点を当て幅広い方法論を用いて設計されている。プログラムのタイプによっては、サービスを提供される個人や地域社会への効果と同じように、学生への効果を評価することがサービスマーケティングには包含されていることもある。

サービスマーケティングは「人間の成長や目的、社会の見方、地域社会への関わり方、知識を得る方法」(Kendall, 1990, p. 23) といったことについての哲学でもある。サービスマーケティングを哲学のレベルに止揚するのは、互惠という要素である。すなわち、「他者や地域社会の発展やエンパワーメントのためのサービス、相互学習といった価値を表現することは、学習者(学生)とサービスを提供される側との社会的教育的交流の目的や本質、過程を決定する」(Stanton, 1990, p. 67)。それゆえ、サービスマーケティングは、互惠の哲学なのであり、そこには、慈善から正義へ、サービスを提供することからニーズを除去することへ変化していくよう、一致協力することが含意されている。

教育学としてのサービスマーケティングは、学習を支える基礎に経験があり、学習が生起するように設計された省察という中心部分や意図があるような教育である。Kolb (1984) の経験学習サイクルの概念は、Dewey や Piaget, Kurt Lewin の仕事を踏まえて、教育学としてのサービスマーケティングの役割を解明するのに有用である。彼のモデルは、絶え間なく再考する4つのステップのサイクルとして、学習の経験を概括している。すなわち、具体的経験、経験についての省察、総合と抽象的概念化、自発的な試行の4ステップであり、自発的な試行とは、新たな状況に対して概念を試してみるということである。どんな時点からでもこのサイクルに入ってくるかもしれないが、サービスマーケティングに従事する人は、具体的なサービスを提供する経験から始まる人が多いようだ。そして、実際に起こったことは何か、それらの観察から生じた含意が何かについて分析しながら、その経験についての省察の段階に入る。次の段階では、学習者は、省察によって、現在の知識を使って観察と含意を統合し、サービスへのニーズが起こる世界や根本的な原因についての学習者自身の理解が深まるよう、概念や疑問を練り上げていくことになる。モデルの第4段階では、学習者は、異なる状況に彼らの概念を試してみる。学習者は、この試行によって、このサイクルを何度も何度もやってみることになる。第3章では、Kolb のモデルとサービスマーケティングとの関係をもう一度考えてみる。

筆者が最近関わっている議論は、政治的な立場としてのサービスマーケティングに焦点を当てたものだ。社会的正義に関わっていることで、サービスマーケティングは厳密には価値中立的なものではない。にもかかわらず、サービスマーケティングの提案者や実践家は、直接的にしる間接的にしろ、特定の政治的集団や個人的に抱いている政治的見解の影響を参加者が受けないように、最大の努力を払わなければならない、と筆者は断固として考えている。この種の影響は、ふさわしくない

し排他的である。それに、自身の使命や実践にサービラーニングを統合しようとする教育機関の意思に不都合な影響を与えるだろう。

高等教育でのサービスの伝統

こんにちのサービラーニングの概念や実践は、高等教育機関でのサービスについての長い伝統に基礎付けられていることは重要な点である。高等教育の卓越した歴史の中で、Frederick Rudolph (1962) は、「初めから、米国の大学は、公共的な目的や過去、現在、未来に対する責任をまとっていた」(p. 177) ことを思い出させてくれる。1636年に Harvard 大学が設立されて以降、米国の高等教育の目標には、地域社会での暮らしに自発的に関わっていくために、市民としての準備が含まれていた (Smith, 1994, p. 55)。

米国の独立戦争以降、高等教育の目的は、一人ひとりの学生から新しい国の建設へと焦点をシフトさせてきた (Boyer, 1994)。Rudolph (1962) は、1824年に Rensselaer 職業訓練機関が設立されたように、教育機関の設立は、鉄道や橋梁といった物理的社会的インフラを建設する人々からの要請に対応するものであったと指摘している。

1862年に Land-Grant 法が可決したのは、高等教育とサービスの概念、とりわけ農業や工業に関係しているサービスとの切っても切れないつながりがある。このつながりによって、まさに1902年に Princeton 大学の総長となった Woodrow Wilson は、「国の年次計画に大学が地位を占めるのは、学習ではなく、サービスの精神なのだ」(Boyer, 1994, p. 48 の引用) と主張した。Stanford 大学の総長だった David Starr Jordan は、1903年に、「この国の全大学の運動は、「現実」と「実践」に向かって前進する」(Boyer, 1994, p. 48 の引用) と宣言した。

「米国の新しい大学の創造」の中で、Boyer (1994) は、サービスの先見性は何度も主張されてきたと言っている。経済が崩壊し、世界大恐慌が起こった時、Franklin D. Roosevelt 大統領は、著名な学者を彼のコンサルタントとして仕えさせるために雇った。第二次世界大戦中、研究大学は、新たな問題の解決策を創出するために、政府に参加した。戦争の結果として、政府と高等教育との2つの重要なパートナーシップが設立された。全米科学財団 National Science Foundation と復員兵援護法 GI Bill である。ソビエト連邦が1957年に人工衛星 *Sputnik* を打ち上げるやいなや、初等中等学校における教育を改善する方法を求めて、高等教育は、政府とのさらにもう一つのパートナーシップに参加した。Boyer (1994) が指摘しているように、「まさに1958年の国防教育法 National Defense Education Act という名称は、明らかに、わが国の安全保障と高等教育を結びつけるものであった」(p. 48)。

サービラーニングの出現

キリスト教青年会 YMCA や 4H クラブ 4-H, ボーイスカウト・ガールスカウト運動 Scout-

ing movement, ギリシャ文字友愛会 Greek-letter organizations, 多くのキャンパスミニストリー campus ministry 活動などをはじめとして大学生の地域社会サービスは、長い歴史を持っている。こうした活動は、John F. Kennedy 大統領が、1961年に設立した平和部隊 the Peace Corps に触発されて、数的にも社会的注目の点でも、1960年代に劇的に成長した。1965年にはボランティア派遣による救貧計画 Volunteers in Service to America (VISTA) が立ち上げられ、若者やほとんどの大学生、当時の卒業生が米国内の諸問題に取り組むことに従事した。1960年代の市民権運動は、高等教育機関と学生たちとの両方に、急拡大する社会的正義を要求する運動への参加を喚起した。

経験教育の一形式として、サービ斯拉ーニングは、経験に関する Dewey の理論にその根源がある。「それは、経験主義運動の哲学的な試金石になっている」(Smythe, 1990, p. 296)。インターンシップやコーオペ教育、その他の経験学習の形式と同じように、サービ斯拉ーニングは、1960年代後半から1970年代にかけて多くの大学のキャンパスで立ち上がり開花した。

service-learning という言葉は、1967年の南部地域教育委員会 the Southern Regional Education Board での Sigmon と William Ramsey の仕事において、初めて現われる (Giles and Eyller, 1994)。1969年、経済機会オフィス the Office of Economic Opportunity は、全米学生ボランティアプログラム the National Student Volunteer Program を立ち上げた。それは、間もなく全米サービ斯拉ーニングセンター the National Center for Service-Learning となった。2年後、このプログラムは、連邦の庁である ACTION を組成するために、VISTA と平和部隊とともに統合された。学生サービスのナショナルセンターの一つとして、ACTION は雑誌 *Synergist* を発行し、ネットワークを開発し、さまざまな活動の元手となる資金を分配した。そのプロジェクトの一つで ACTION のための大学年 the University Year for ACTION は、1970年代に100以上の大学等から10,000人以上の学生の参加を集めた。キャンパスを基盤にしたサービスプログラムには、この時期に始まったものが多い。廃れてしまったものも多いが、いくつかは未だに続いている。加えて、地域ないし大学連合で取り組むプログラムは、1960年代から1970年代にかけて現われる。たとえば、南部地域教育委員会の資源開発インターンシップや Great Lakes College of the Midwest による Philadelphia 都市セメスター、Associated College of the Midwest による Chicago 都市セメスター、Higher Education Consortium for Urban Affairs (HECUA) による双子都市圏の大都市研究チームと都市の教養教育、などがあげられる。

全米サービ斯拉ーニングセンターは比較的短命ではあったが、サービ斯拉ーニングに関心を持った大学等は、その周辺に形成された組織を通じてネットワークを存続させた。フィールドでの経験教育とサービスを提供するインターンシップの別々のグループを融合させて、全米インターンシップ・経験教育協会 the National Society for Internship and Experiential Education (NSIEE) が1978年に設立された (NSIEE は、その後、1994年には全米経験教育協会 the National Society for Experiential Education (NSEE) となる)。NSIEE は、全米サービ斯拉ーニングセンターが所蔵するサービ斯拉ーニングに関するかなりの量の資料を保管・整理したり、配

布したりする役割を担うようになった。並行して、成人学習・経験学習委員会 the Council for Adult and Experiential Learning は、大学等で経験教育が受け入れられるようになる基盤を築くことに大きな役割を果たした（1995年に G. Hesser と交わした個人的なやりとり）。

1960年代および1970年代から学ぶ教訓

1960年代から1970年代に大学等のキャンパスで足がかりを得たサービslラーニング運動は続かなかった。Kendall は、大学生を巻き込んだサービスに関する多くのプログラムが消滅したことについて3つの陥穽を指摘している。

1. プログラムのほとんどが、学校や機関の中心的な使命や目標に統合されていなかった。
2. 地域社会サービス運動におけるこれらのプログラムは、権力関係のバランスや、「他者を助けること」ないし「いいことをすること」の陥穽についてのいくつかの重要なプログラム上の教訓を学んだ。父親的温情主義や関係集団との不平等な関係性、固有のニーズに対処している他人を支援するというよりも「他人のためにやる」とか「他人を助ける」といった慈善にのみ焦点が当たる傾向が、うまく意図を持ったプログラムにもかかわらず、プログラムに陥穽を生むようになる。
3. 地域社会でサービスを提供する経験を通して若者の学習が促進されるように思われている一方で、サービスを提供するという経験には、明確な学習も効果的なサービスもなされるということは保証されていない、ということを学んだ（1990, pp. 8-10）。

Kendall(1990) は、多くの教育者や地域社会のリーダー、学生のうちには、サービslラーニングの潜在能力を信じていて、1970年代後半から1980年代の「ミージェネレーション me generation」を経ても成功し持続しているプログラムには、成功のために組み入れられるべき必要な要素があって、それを特定し続けた人もいと報告している。彼らの仕事は、高等教育機関や学生、地域社会、それに連邦政府などにおける昨今のサービslラーニングに対する関心の高まりを促進する役割を果たしている。

こんにちのサービslラーニング

1985年、大学生の地域社会サービスは、新たにはずみがついた。合衆国教育委員会連合 the Education Commission of the States は、キャンパスコンパクト Campus Compact という公共と地域社会サービスのためのプロジェクト the Project for Public and Community Service を始めた。キャンパスコンパクトは、自分たちの機関で教学的に基礎付けられた地域社会サービスを促進し支援しようと固く約束した大学等の総長らの組織であるが、現在、500以上のメンバーになっている。総長たちがキャンパスコンパクトを立ち上げたとき、かつての大学の卒業生のグループは、学生が地域社会でサービスを提供することを促進するように、キャンパスアウトリー

チオポチュニティリーグ the Campus Outreach Opportunity League (COOL) を組成した。その結果、多くの学生主導のサービスプロジェクトが生まれ、COOL は、広がり続ける全国的なネットワークになった。COOL は、およそ1,000の大学等とともに活動し、2,000名以上の学生が、COOL の年次会議に参加した。COOL が提唱した思慮に富んだ地域社会サービスの重要な要素 Critical Elements of Thoughtful Community Service は、何百もの質の高い地域社会サービスプロジェクトの開発の道しるべとしての役割を果たした (Campus Outreach Opportunity League, 1993)。

1983年から1989年にかけて、高等教育改善基金 the Fund for the Improvement of Postsecondary Education の支援を受けながら、全米経験教育協会の研修を受けたコンサルタントは、500以上の大学等とともに、経験教育を開発し強化するために活動した。コンサルテーションは、いくつかの前提に基づいていた。すなわち、サービ斯拉ーニングをはじめとするすべての経験教育は、明確に機関の使命に根ざしていなければならない、サービ斯拉ーニングは学部教員を巻き込まなければならない、サービ斯拉ーニングはカリキュラムに統合されていなければならない、サービ斯拉ーニングはしっかりとした理論と教育学的実践に基礎付けられていなければならない、という前提である (Kendall, 1990)。

地域社会サービスとサービ斯拉ーニングプログラムが急拡大したことと、効果的なサービスと学習が必ずしも自動的に起こりえないということに多くの人が気付いてきたこととに因って、1987年に、全米経験教育協会は、優れた実践における一連の原理を関連付け、洗練させていくことにした (Kendall, 1990)。激しく徹底した過程は、ジョンソン財団 the Johnson Foundation が主催した1989年の Wingspread 会議において最高潮を迎えた。そこでは、十分な検討の末、『サービスと学習の統合に向けたすぐれた実践の原理』(Porter Honnet and Poulsen, 1989) が提出された。こんにち、論文や文献、法律、学会や機関等が刊行する文書などには、サービ斯拉ーニングのたくさんの定義が記されているが、最近のすべての定義は、Wingspread の原理の前書きにあるキー声明文に基づいている。それは、「学習を組み合わせたサービスで、サービスと学習の双方に価値を付加し、両方を変容させるもの」(Porter Honnet and Poulsen, 1989) というものである。

Wingspread の原理に続いて、Kendall とその仲間、全米経験教育協会の賛助のもとで、91の国や地域の関係団体が協力して、独創的な3巻本『サービスと学習の結合』を、1990年に出版した。同書は、高等教育と同様に、K-12 におけるサービ斯拉ーニングに関する幅広い資源を提供した。これまでに出版されたもののほか、新たに、歴史的なもの、理論的なもの、政策に関連したもの、実践的なもの、プログラムのものを多く含んでいて、サービ斯拉ーニングに関する文献に関する注釈付の書誌情報をも加わっていた。同年、Jossey-Bass 社は、Cecilia I. Delve と Suzanné D. Mintz, Greig M. Stewart によって編まれたサービ斯拉ーニングに関する本『価値の教育としての地域社会サービス』を製作し、教育に関する最初の主要な出版社となった。

1990年代には、サービ斯拉ーニングに関する文献や会議が、まさしく激増した。1991年に、全

米経験教育協会は、もう一つの Wingspread 会議を支援した。その会議は、『サービスと学習の統合に向けた1990年代の研究計画』(Giles, Porter Honnet, and Migliore, 1991)を生み出した。ケロッグ財団 the Kellogg Foundation の支援を受けて、ミシガン大学地域社会サービslラーニングオフィス the Office of Community Service Learning at the University of Michigan は、『例題集1 地域社会サービスに関する学部教員ケースブック』(Howard, 1993),『例題集2 大学生, 大学職員, 学部教員のためのサービslラーニング資源』(Galura and others, 1994),『例題集3 対話の声』を出版した。これらの本は、カリキュラム上のサービslラーニングに焦点を当て、サービslラーニングの科目を設計する際に学部教員に役に立つように編まれていた。サービslラーニングの効果に関する研究を出版してほしいという声にこえて、*Michigan Journal of Community Service Learning* 誌が、1994年秋に立ち上げられた。同年、全米経験教育協会は、『サービslラーニング読本 サービスにおける省察と展望』(Albert, 1994)を出版した。サービスを提供する経験に関して、学生が思慮深く省察することを促すよう設計されたテキストである。キャンパスコンパクトは、重要な資源を生産し続けた。すなわち、『伝統の再考 サービスと学術研究の統合』(Kupiec, 1993)や『カリキュラムの再設計 サービスラーニングの講義概要モデル』(Jackson, 1994),『サービスに関すること 高等教育における地域社会サービスのためのソースブック』(Cha and Rothman, 1994),『サービスの争点 サービスと高等教育の現場からの教訓』(Smith, 1995)といったものだ。

高等教育関連団体が手がけた国の会議や一般の出版物は、当初、サービslラーニングや経験教育が焦点ではなかったものが多いが、サービslラーニングに関する発言や論文を数多く特集するようになった。関連団体とは、米国高等教育学会 the American Association of Higher Education, 独立大学委員会 the Council of Independent Colleges, 黒人大学連合基金 the United Negro College Fund, 米国コミュニティカレッジ学会 the American Association of Community College, 全米学生人事管理者協会 the National Association of Student Personnel Administrators, 米国大学人事協会 the American College Personnel Association, 全米学生雇用管理者協会 the National Association of Student Employment Administrators, 全米キャンパス活動協会 the National Association of Campus Activities, 大学連合協会 the Association of College Unions といった団体だ。

1990年の全国および地域サービス信託法 the National and Community Service Trust Act of 1990 の可決とともに、連邦政府のサービslラーニングへの関心と支援は、1990年代に入って持続的に高まっていった。この法律は、George Bush の1988年の大統領キャンペーン「千束の光 a thousand points of light」が認知されたことを象徴するものであった。「千束の光」キャンペーンは、後に、大統領府全国サービスオフィス the White House Office of National Service とポイントオブライト財団 the Point of Light Foundation の設立をもたらすことになる。大規模な全国サービスプログラムについての Bill Clinton の大統領キャンペーンが作り出した盛り上がりした後、議会での長く白熱した議論は、1993年の全国および地域サービス信託法 the National and

Community Service Trust Act of 1993 の可決によって最高潮を迎えた。その結果、全国および地域社会サービス委員会 the Commission on National and Community Service や ACTION, 新たに設立された全米市民地域社会隊 the National Civilian Community Corps は、一般に、全国サービス公社として知られている全国および地域社会サービス公社 the Corporation for National and Community Service を組成するべく合流した。

その初年、同公社は、米国学習・奉仕プログラム Learn and Serve America を通じて、K-12 と高等教育の両方のサービスラーニングプログラムと同様に、アメリカの the AmeriCorps 全国サービスプログラムの20,000ヶ所に資金を拠出した。公社のプログラムは、サービスラーニングに取り組む大学等にとっても大きな力を与えた。多くの高等教育機関は、大学生に幅広いニーズに対応するために、地域社会の機関や学校と協働関係を築いた。アメリカの参加者は、生活のための助成金のほか、教育を受けるために必要だった借金の返済のためや将来の教育・研修のための資金のために使うべく、サービス修了後に十分な教育的奨学金を受け取った。加えて、学生への資金的援助と言われている1992年の高等教育改革は、1994年7月当初から、各機関に配分されている連邦就業体験プログラムのための予算の5%は、地域社会サービスに従事した学生に報いるよう使わなければならないと規定した。

どんな理由があっても、これまでの大統領はだれもそんなことをしたことがなかったのに、1994年9月8日、Clinton 大統領は、すべての大学等の総長に手紙を書いた。その中身とは、「わが国の至るところで交錯するサービスの倫理を活性化すること」への協力を求めるものであった。大統領の呼びかけに応じて、米国高等教育学会とキャンパスコンパクトは、1995年1月に、全国および地域社会サービスに関する専門家会議 the Colloquium on National and Community Service を開催した。この専門家会議は、既に、高等教育におけるサービスラーニングを取り扱った分科会やワークショップ、出版物などを生み出している。

機関の伝統やアプローチ、モデル

機関の違いは、その使命や伝統、サービスやサービスラーニングに対するアプローチの違いにはっきりとあらわれる。サービスラーニングをひとつの哲学のように採用して、省察や互惠の重要な要素を含んだプログラムを開発したところもある。他方、さまざまな範囲で地域社会サービスに関する学生の取り組みを支援し、サービスラーニングの基本的な概念を含んでいるかどうかよくわからないところもある。

Notre Dame や Azusa Pacific, Messiah College, Loyola College in Maryland といった教会に関係する大学等では、サービスラーニングは、機関の精神的な使命や社会的正義の探求にしっかりと根付いている。Rutgers や Baylor, Providence College といったところでは、サービスの関連で、市民権や市民としての責任、参加の民主主義に関するプログラムをまず見つけることを選んだ。Stanford や Brown, Bentley といった私立大学や、Portland State や University of

Washington, Brevard Community College といった公立大学では、サービslラーニングセンターが、サービスと学術研究とを結びつける役割を果たしている。University of Richmond は、サービスとリーダーシップのつながりをプログラムの基礎にしている。Clark Atlanta University や Chicago State University, Southern University, A&M College といった歴史的には黒人のための教育機関とされているところと同様に、University of Minnesota や University of Pennsylvania, Miami-Dade Community College, Gettysburg College では、サービslラーニングプログラムは、地域社会の協働関係と公共問題解決を基礎にしている。地域社会連携に基礎を置いたサービslラーニングプログラムを持つ教育機関には、他の大学等と連合体を組成しているところもある。連合体には、the Shriver Center Consortium in Baltimore や the Urban Community Service Program in California, Regional Action Team in Colorado などがある。

こうしたところはますます増えているのだが、Franklin and Marshal や Portland State, Alverno College, Waynesburg College, Chandler-Gilbert Community College といった教育機関は、サービslラーニングを学部教育のコアカリキュラムに統合している。他のところでは、特定の現場に関する知識をより深める一つの方法として、サービslラーニングを考えているところも多い。一般的に、学生部門に基礎においたプログラムでは、心理的なことや道徳的なこと、リーダーシップ、市民権意識の涵養といったことが、実践的な技能を磨いたり、個人的な差異や共通性に対する学生の正しい理解を深めたりすることが強調される。

サービslラーニングプログラムの制度上の関わりは、広範なレベルで存在している。サービslラーニングがその中心であるような機関においては、その使命にとって重要で強調されるべき側面である。そのようなところでは、制度上の資金は確保されていて、政策は明確にサービスを支援していて、学生、学部教員、職員は、サービslラーニングに取り組むことに理解が深く、価値あるものとして関わっていて、サービslラーニングに強く関わるのが、すべての構成員に分有されている。他方で、サービslラーニングをコーディネートすることを増進したり試みたりしている多くの大学等では、サービslラーニングは、機関の政策や実践の中では周辺的なことのままであったり、資金が不足していつも問題になっていたり、サービslラーニングに取り組んでいる関係者が、機関の主流から孤立していると感じたりするところも多い。

地域社会サービスとサービslラーニングプログラムは、キャンパスのさまざまな部課が所管している。学生に関係する部門は、サービスプログラムの初めのコーディネートをやっていて、その多くは、機関の中でサービスに関してとても重要な役割を担い続けている。キャンパスコンパクトが1994年に構成員に対して行った調査によれば、学生関係や学生活動に関するオフィスが、サービスプログラムのもっとも一般的な所管部課(45%)となっている(Cha and Rothman, 1994)。キャンパスミニストリーを含む宗教に関係する部門がサービスプログラムを所管していることも多い。キャンパスミニスターが公職の奉仕活動として初めはやっていたプログラムであったりすること多い。キャリアセンターやインターンシップオフィスが所管しているプログラムもある一方で、教学部門や学部長の権限下で実施されるものも増えている。教学部門と学生

部門と一緒にサービslラーニングを担当していると報告している大学等や、総長室が直接担当していると報告している大学等もある。

教学部門にもともと関連しているプログラムは、機関の深い関わりを反映している傾向にある。その結果、より中心的で協働的なプログラムになっていく反面、学習が過度に強調され、サービスが過小評価される危険もはらんでいる。学生部門が所管しているプログラムは、学生のニーズに対応する柔軟性が高く、学生によるイニシアチブに対して寛容でもある傾向にある。地域社会のニーズに対しても効果を発揮する対応ができる反面、サービスが過度に強調され、学習が過小評価される危険をはらんでいる。また、機関にとってはそれほど高い優先順位ではなく、資金的には不安定で、連携があったとしてもひとつの教学部門としか連携していなかったりすることも多い (National Center for Service-Learning, 1980)。サービslラーニングが事務的にはどこで所管されているということとは関係なく、サービslラーニングに周辺部ではなく中心的に取り組んでいるといっても、サービslラーニングを教学とそこまでではなくともカリキュラムに沿った実践の両方に統合しなければならない、というのが本書の前提である。

地域社会サービスからサービslラーニングへの移行

高等教育と現代社会の観察者は、高等教育には、増え続ける人々のニーズに対処し、増え続ける複雑な社会経済問題に対応する時には、明らかに積極的に重視されるべき豊かな資源と莫大な潜在能力がそろっていると強く信じている。しかし、連邦や州政府の多くを含め世間では、大学等は、働かない学部教員、放漫な財政運営、ありあまる職員といった恩恵を受けていると思われるかもしれない。が、実態はその逆なのである。削られる公的支援、跳ね上がる経費、老朽化するインフラ、常に多様化し続ける学生という時代の中で、実際には多くのサービスに対するニーズが形作られているし、高等教育機関は、自分たちにできることとできないことについて戦略的に常に考えているのである。自分たちの基本的な使命に耳を傾け直したり、自分たちの基本的な目的に厳しく焦点を当てたりすることがますます多くなっている。

本書が、ボランティアや地域社会サービスではなくて、サービslラーニングについての本であるのはなぜかというのは、まさにこのことである。社会の大きなニーズや高等教育の中での優先順位をめぐる競争が高まっているという時代に、高等教育がサービスとの歴史ある関わりを持続させるなら、大学等は、サービslラーニングに従事する機会を学生のために開発することで、自分たちの学生に対する教育上の目標を実現させなければならないということは外せないのである。地域社会サービスは一般的にいいことだと思われているけれども、すべてのいいことが高等教育の領域であるということではない。省察の構成要素と意図的な学習目標が不足しているボランティアや地域社会サービスプログラムよりも、学生の学習と成長に対する機関の目標を持ったサービslラーニングは、高等教育の使命と優先順位の中に、実にしっかりと当てはまる。

高等教育の業界では、学部教育の質を強化するニーズに関する注目が再び集まっている

(Association of American Colleges, 1998; Boyer, 1988; Chickering, and Gamson, 1987; Study Group on the Condition of Excellence in American Higher Education, 1984; Wingspread Group on Higher Education, 1993)。これらの関心は、ばらばらでつじつまが合わないカリキュラムに関することや、目的と目標が明らかに不足していること、価値観が不在であったり、教育を伴う教室外での経験を統合していく必要性であったり、働くことについて学生にもう少しきちんと準備をさせる必要性であったりする。Wingspread Group on Higher Education (1993) は、少なくとも全米の大学等に共通する少なくとも3つの問題は、「真剣に価値を認めること、学生の学習を第一義に据えること、学習者の共同体を創造すること」(p. 7) であると指摘している。これらの問題に対応するひとつの方法として、そのグループは、大学等が大勢の学生のために地域社会サービスプログラムを組織し持続させ、「キャンパスの向こう側の世界で、経験し省察する機会を学生に与えることに自分たち自身が熱心に取り組むこと」(p. 10) を薦めている。Boyer は、「道徳的なジレンマと倫理的な応答をめぐって、意味を深く問いながら、自分が何を学ぶかとうやうやって生きるかを結びつけることに、学生が気付いたかどうか」(1988, p. 296) を問うことによって、大学教育の質を判定することを提案している。「価値を形成したり共通の利益を増進させたりする知識を得て、それが切り開く大きな展望が、卒業生たちに希望を与える。大学が成功するというのはそういうものだ」(p. 296) と彼は続けて指摘する。Chickering and Gamson (1987, p. 1) は、学部教育の改善のための7つの原理をはっきりと述べている。それは、明らかにサービスラーニングに向けられて指摘されたものである。

学部教育におけるすぐれた実践

1. 学生と学部教員のふれあいを促進すること
2. 学生どうしの協力を促進すること
3. アクティブラーニングを促進すること
4. すばやくフィードバックを与えること
5. 課業の時間を強調すること
6. 高い期待を伝えること
7. 学習の多様な才能と方法に敬意を払うこと

サービスラーニングが効果的に対応すべきもう一つの目標は、市民権意識教育と民主主義に参加するための準備である。Frank Newman (1985) によれば、「こんにちの米国の教育において危機があるとすれば、テストの点数が下がっていることよりも、わたしたちが市民権意識のための教育を提供しそこなっていることだ。そして、そこには全国の学校や大学にもっとも重大な責任があるということだ」(p. 31)。市民になることや民主主義に参加することの意味を学生に「教える」のは、実質的には不可能だ (Barber, 1993; Astin, 1994)。「どうやったら責任感が持てるとか、知識が持てるとか、市民に関心が持てるとかいうことは誰にも言えない。できるのは、その過程に関わることだけだ」(Cirone, 1989, p. 5)。Astin (1994) は、高等教育の使命を成就するもっとも効果的な方法としてのサービスラーニングは、「民主主義はどのようににはたらいっている

かだけでなく、行動的で知識ある民主主義の参加者になる自分たちの責任について、理解し正しく認識するような教育された市民を育てることである」(p. 24)と指摘している。

市民権意識と民主主義に参加することを学生に準備させるのに加えて、高等教育の目標は、世の中で働くことを彼らに準備させることを含んでいる(Boyer, 1988; Pew Higher Education Roundtable, 1994)。学術的な知識は、とても発達した認識的社会的技能がないとうまく応用できない。加えて、学生は、一つの生涯キャリアの準備というより、ひとまとまりの移転可能な知識を獲得しなければならない。サービスラーニングは、知識を総合したり、創造的に問題を解決したり、建設的な共同作業を行ったり、効果的に意思疎通したり、筋がよく通った意思決定をしたり、交渉したり、妥協したりするような技能を開発する機会を学生に与える。サービスラーニングを通して開発される特性には、イニシアチブや柔軟性と順応性、寛容さ、共感といったものも含まれる。専門教育におけるサービスラーニングは、内科医や弁護士、ビジネスリーダー、政府官僚、他のキーになる実務者や意思決定者としての社会的な責任を高めていく。

高等教育機関の間で分有されているもう一つの目標は、人々の違いや共通点についての学生の正しい理解を開発し、民族や性差、物理的・心理的能力、宗教、階層、性的出自の違った人々の価値を重んじる地域社会で、平穏で生産的に生活することを各自に教えることだ。サービスを提供する側とサービスを提供される側との互惠と、意図を持った学習目標のある省察の構成要素とを基本的な教義に持つサービスラーニングは、価値や規範は社会的にどのように構築されるのかといった問題や、社会的不公正の原因を、参加者がより深く理解するのを助ける。

地域社会や全国、地球規模の共同体でのサービスに大学生を取り組ませるような機関のプログラムについて、青写真やモデルを提案することは、無分別で適当ではない。しかし、学生や地域社会、機関が明らかにもっとも関心を持っているのは、サービスラーニングの原理を欠いた地域社会サービスやボランティアプログラムよりも、サービスラーニングに、高等教育が関わるとすれば、大学等は既にできあがっている自分たちの教育上の目標に対処することになるということだ。

結 論

本章は、サービスラーニングを定義し、ボランティア精神や地域社会サービスとの区別を明確にすることから始めた。サービスに関する高等教育の伝統やサービスラーニングの出現、こんにちの大学等におけるサービスラーニングの概観について議論した。この導入では、サービスラーニングは、カリキュラム上のものであり、そこまでではなくてもカリキュラムに沿ったものでもあって、地域社会の向上に関する成果と同様に、学生の学習や成長に関する幅広い成果を醸成するように設計されるものであると断言してきた。実際、サービスラーニングは、高等教育が自分たちの包括的な目標を達成することができる重要な方法である。サービスラーニングの活動は、その活動が科目を基盤にしているかどうか、1回だけか集中的かによって、構造化された省察や互

恵の基本的な構成要素を含んでいるように活動を設計するのに値する。本書の続く章は、教育者は、サービslラーニングの実践で学生の学習を増進するにはどうしたらいいのか、教えることと研究することを強化するにはどうしたらいいのか、人々や他の資源を社会の問題に対応しもっとも重要なニーズに対処させるにはどうしたらいいのか、といったことを検討する。

文 献

- Albart, G. (ed.). *Service-Learning Reader: Reflections and Perspectives on Service*. Raleigh, N. C.: National Society for Experiential Education, 1994.
- Association of American Colleges. *A New Vitality in General Education*. Washington, D. C.: Association of American Colleges, 1998.
- Astin, A. W. "Higher Education and the Future of Democracy." Inaugural lecture as Allan Murray Carter chairholder, University of California, Los Angeles, Oct. 1994.
- Astin, A. W., Korn, W. S., and Sax, L. J. *The American Freshman: National Norms for Fall 1994*. Los Angeles: Higher Education Research Institute, University of California, 1994.
- Barber, B. R. "A Mandate for Liberty." In S. Sagawa and S. Halperin (eds.), *Visions of Service: The Future of the National and Community Service Act*. Washington, D. C.: National Women's Law Center and American Youth Policy Forum, 1993.
- Berry, H. A. "Service-Learning in International/ Intercultural Settings." *Experiential Education*, 1988, 13 (3), 3.
- Berry, H. A. "Reexamining Service-Learning in an International Context." Paper presented at the International Experiential Learning Conference, Washington, D. C., Nov. 1994.
- Bok, D. *Beyond the Ivory Tower: Social Responsibilities of the Modern University*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1982.
- Bok, D. *Higher Learning*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1986.
- Boyer, E. L. *College: The Undergraduate Experience in America*. New York: HarperCollins, 1988.
- Boyer, E. L. *Scholarship Reconsidered: Priorities of the Professoriate*. Princeton, N. J.: Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching, 1990.
- Boyer, E. L. "Creating the New American College." *Chronicle of Higher Education*, Mar. 9, 1994, p. 48.
- Campus Outreach Opportunity League. *Into the Streets: Organizing Manual, 1993-94 Edition*. St. Paul, Minn.: COOL Press, 1993.
- Cha, S., and Rothman, M. *Service Matters: A Sourcebook for Community Service in Higher Education*. Providence, R. I.: Campus Compact, 1994.
- Chickering, A. W., and Gamson, Z. F. *Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education*. Racine, Wisc.: Johnson Foundation, 1987.
- Cirone, W. J. "Linkages Between Civic Literacy and the State History/ Social Science Framework." Address to Constitutional Rights Foundation Area VI, Santa Barbara, Calif., May 1989.
- Coles, R. *The Call of Service: A Witness to Idealism*. Boston: Houghton Mifflin, 1993.
- Cruz, N. "Reexamining Service-Learning in an International Context." Paper presented at the International Experiential Learning Conference, Washington, D. C., Nov. 1994.
- Delve, C. I., Mintz, S. D., and Stewart, G. M. (eds.). *Community Service as Values Education*. New Directions for Student Services, no. 50. San Francisco: Jossey-Bass, 1990.

- Ehrlich, T. "Taking Service Seriously." *American Association of Higher Education Bulletin*, 1995, 47 (7), 8-10.
- Galura, J., and others. *Praxis II: Service Learning Resource for University Students, Staff, and Faculty*. Ann Arbor: OCSL Press, 1994.
- Galura, J., and others. *Praxis III: Voices in Dialogue*. Ann Arbor: OCSL Press, 1995.
- Giles, D. E., and Eyler, J. "The Theoretical Roots of Service-Learning in John Dewey: Toward a Theory of Service-Learning." *Michigan Journal of Community Service Learning*, 1994, 1 (1), 77-85.
- Giles, D., Porter Honnet, E., and Migliore, S. *Research Agenda for Combining Service and Learning in the 1990s*. Raleigh, N. C.: National Society for Experiential Education, 1991.
- Hackney, S. "The Roles and Responsibilities of Urban Universities in Their Communities: Five University Presidents Call for Action." *Universities and Community Schools*, 1994, 1-2, 9-11.
- Harkavy, I. "Community Service and the Transformation of the American University." In S. Sagawa and S. Halperin (eds.), *Visions of Service: The Future of the National and Community Service Act*. Washington, D. C.: National Women's Law Center and American Youth Policy Forum, 1993.
- Howard, J. (ed.). *Praxis I: A Faculty Casebook on Community Service Learning*. Ann Arbor: OCSL Press, 1993.
- Jackson, K. (ed.). *Redesigning Curricula: Models of Service Learning Syllabi*. Providence, R. I.: Campus Compact, 1994.
- Karasik, J. "Not Only Bowls of Delicious Soup: youth Service Today." In S. Sagawa and S. Halperin (eds.), *Visions of Service: The Future of the National and Community Service Act*. Washington, D. C.: National Women's Law Center and American Youth Policy Forum, 1993.
- Kendall, J. C. "From Youth Service to Service-Learning." In A. C. Lewis, *Facts and Faith: A Status Report on Youth Service*. Washington, D. C.: Youth and America's Future: William T. Grant Foundation Commission on Work, Family, and Citizenship, 1988.
- Kendall, J. C. "Combining Service and Learning: An Introduction." In J. C. Kendall (ed.), *Combining Service and Learning: A Resource Book for Community and Public Service*, Vol. 1. Raleigh, N. C.: National Society for Experiential Education, 1990.
- Kerr, C. *The Uses of the University*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1963.
- Kolb, D. *Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice Hall, 1984.
- Kupiec, T. Y. (ed.). *Rethinking Tradition: Integrating Service with Academic Study on College Campuses*. Providence, R. I.: Campus Compact, 1993.
- Levine, A. "Service on Campus." *Change*, July/ Aug. 1994, pp. 4-5.
- National Center for Service-Learning. *The Service-Learning Educator: A guide to Program Management*. No. J302-513. Washington, D. C.: U. S. Government Printing Office, 1980.
- Newman, F. *Higher Education and the American Resurgence*. Princeton, N. J.: Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching, 1985.
- Pew Higher Education Roundtable. "To Dance with Change." *Policy Perspectives*, 1994, 5 (3), 1-12.
- Porter Honnet, E., and Poulsen, S. J. *Principles of Good Practice for Combining Service and Learning*. Racine, Wisc.: Johnson Foundation, 1989.
- Rudolph, F. *The American College and University: A History*. Athens: University of Georgia Press, 1962.

- Seidel, R. "Reexamining Service-Learning in an International Context." Paper presented at the International Experiential Learning Conference, Washington, D. C., Nov. 1994.
- Sigmon, R. *Linking Service with Learning*. Washington, D. C.: Council of Independent Colleges, 1994.
- Smith, M. *Service Counts: Lessons from the Field of Service and Higher Education*. Providence, R. I.: Campus Compact, 1995.
- Smith, M. W. "Issues in Integrating Service-Learning into the Higher Education Curriculum." In *Effective Learning, Effective Teaching, Effective Service*. Washington, D. C.: Youth Service America, 1994.
- Smythe, O. "Practical Experience and the Liberal Arts: A Philosophical Perspective." In J. C. Kendall (ed.), *Combining Service and Learning: A Resource Book for Community and Public Service*, Vol. 1. Raleigh, N. C.: National Society for Experiential Education, 1990.
- Stanton, T. "Service-learning: Groping Toward a Definition." In J. C. Kendall (ed.), *Combining Service and Learning: A Resource Book for Community and Public Service*, Vol. 1. Raleigh, N. C.: National Society for Experiential Education, 1990.
- Study Group on the Conditions of Excellence in American Higher Education. *Involvement in Learning*. Washington, D. C.: U. S. Department of Education, 1984.
- Wingspread Group on Higher Education. *An American Imperative: Higher Expectations for Higher Education*. Racine, Wisc.: Johnson Foundation, 1993.

(受付 2007年 6 月29日)